
泣き桜

梅小路 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泣き桜

【Nコード】

N2040C

【作者名】

梅小路 葵

【あらすじ】

” 鬼の副長 ” と呼ばれた男、 ” 土方歳三 ” 。歴史に大きな名を残した新撰組を作り上げた彼の生涯には、数え切れない程の ” 出会い ” と ” 別れ ” があった。新撰組副長として、そして、男として……
最期まで自分の武士道を信じて生きた生涯を描く長編私小説。

第一話

「雨が降っている…」

誰にいったのではない。土方は格子の外を見た。

六月の半ばになり、京の町屋の庭には紫陽花が静かにたたずんでいる。

青々とした大きな葉の真ん中に、薄紫色の花が咲いている。がくの
上に乗っている丸い粒が、重みを含んですべるようにして落ちてい
く。

時折、傘を差しながら通り過ぎていく人を目にしながら、土方はな
んとなく甘酒を口にしていた。

土方についてはもう語っただろうか。新撰組副長を務める、二重の
はれぼつたい目をした男“ひしかたとしぞう土方歳三”である。

だが、はれぼつたい二重の下は長い切れ目で “鬼の副長” と呼ば
れた男とは思えない涼しさがあった。

今日は、新撰組の制服

もつとも、戦いするとき以外で隊内全

員が制服を着用する習慣はあまりなかったそうだが　　は着ていない。代わりに、黒に近い紺色の袴と無地の羽織を羽織っていた。二本の指で挟むようにして持っている御猪口おぢぐちには小さな雀の絵が描かれていた。どの季節にも合うように雀の柄にしてあるのだろうか。店の中は薄暗く、客は土方がいるだけの静かな茶店には、土の匂いが満ちていた。

傘のない土方は雨が止むまで待っていたが、雨が止む気配はいつこ
うに感じられなかった。

小雨なので屯所まで歩いていくことは出来るし、新撰組副長の名を
あげれば傘ぐらい借りて帰れたが、そうしようとしなかったのはそ
ういう気分だったからだろうか。

わからない。わからないままに書き留めておく。

今日は見回りもなく仕事も多くなかったから、久しぶりに一人で京
の街を歩いてみようと思った。

昼食を取ったあと、新撰組一番隊隊長、沖田総司と縁側ですれ違っ
た。

土方はこの若者にだけ行き先を伝えると、屯所を出た。理由は特に
なかったが、清水へ一人で行きたかった。それだけである。行きた
い場所が清水であるということも、あまり理由がないのかもしれない。
い。

清水坂を登りきったところに、一軒の小さな茶店がある。たまにそ

ここに寄って茶を飲んだりするのだが、甘いものは食べなかった。

店の奥の席の近くには木の格子がはまっけていて、そこから表の通りが見える。

通りには参拝に來た女子供や僧の姿があったが、武士と見受けられる者はいなかった。

土方が先程まで見ていた紫陽花の花も表通りに咲いている。

清水の本堂へ続く道の傍に紫陽花の株がいくつも植えられていた。石碑の影になって隠れている葉も、おそらく紫陽花のものだろう。

土方はそこで一服していた。どうせ雨が止む心配がないのならゆっくりするのも悪くないだろうと思ったのである。

シンとした空気の中で小雨の降り注ぐ音だけが聞こえる。まるで自分以外のものが存在しないかのように思っても不思議はない、そんな物音ひとつしかない場所だった。

（普段なら参拝客で賑わう季節なんだがな）

土方は京都の出身ではない。土方だけでなく、新撰組局長の近藤勇も沖田総司も京都の出身ではなかった。

これは余談になるかもしれないが、土方は多摩地方（現在の東京都に含まれる）の石田村というところで生まれた。

石田村というところでは、打ち身によく効く薬で有名だったらしく、土方も商人として薬屋で地方を歩いたこともあった。

茶店で甘酒を持ってきたのは店主ではなく、小女だった。少し長い髪を頭の上で纏めて、化粧はしていない。

「お待たせしました。甘酒どすウ」

運ばれてきた甘酒を注ぐと、小女は店の奥へ入っていった。客も当分こない様子である。

人気の少ない午後のことである。半刻ほどたつて、辺りは薄暗くなってきた。

申刻（午後四時）を差す寺の鐘は鳴っていないが、夏至に近づいたこの季節でも雨が降っていればいつもより早く暮れるだろう。

まだ雨は降り続けていたが、少し寒くなってきたので土方は席を立った。

店主を呼ぶといくらかの金子を渡し、暖簾のれんをくぐった。ところどころ雲の合間から弱い光が差し込んでいる。

土方は歩き始めたが、後ろに誰かがいるのを感じて静かに柄に手をかけた。

足音からして、女子供ではない。少し擦るようにして歩くのは相当稽古を積んだ者の歩き方だった。

「誰だ」

薄暗く、霧のかかった小雨が土方の羽織を湿らせた。

相手の返答がないのならば、相手の刀を抜かせるまでだと思っただが、返事は意外と気が抜けていた。

「あらら。そんなにお怒りになられるとは思わなかった」

「…なんだ。総司か」

柄から手を離れた土方を見て、くすくす笑っている。

沖田だった。

「とっくにお気づきになられているものだと思っていましたが…」

というところを見ると、土方の後を着いてきたらしい。沖田は傘を片手に笑っていた。

「着いてきてたのか」

「いえ。たまたま参拝に来ようと思っただけです」

屈託のない笑顔で言うと、土方の隣に来た。

「　　というのも土方さんが心配だったからなんです」

「なに？」

再び歩き始めた二人の足元には、ところどころ小さな水溜りがあった。沖田の差している傘が映る。

「俺はお前に心配されるような赤ん坊じゃないぞ」

「そりゃあもう…十分にわかってますよ。こんなに怖い赤ん坊、見たことがない」

くすつと笑って土方の顔を見た。相変わらず仏頂面である。別に怒っているわけではないのだが。

「いえね。屯所を出た後、雨が降ってきたでしょう。土方さん、雲行きが怪しいのを知ってか知らずか傘を持ってお行きにならなかったから、ちよつと心配になったんですよ」

沖田が言うのを横面で聞きながら土方はチラリと空に目をやった。

「土方さんって雨に濡れても平気なお方だから、心配するまでもなかったみたいですね」

まるで今気づいたことのように言ったので、土方は

「そんなこともわからなかったのか」

もしかするとこの男なりの照れ隠しかもしれない。

二人が清水坂を下りはじめる頃にはもう陽が傾きかけていた。

この様子では、壬生の屯所に着くまでには暮れるだろう。

静かな雨の中で、紫陽花の“かく”が濡れていた。

第一話（後書き）

こんにちは。または初めまして。今回も歴史や恋愛をテーマに進めていきたいと思っております。ご指摘・ご指導・ご感想などあれば、お教え下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2040c/>

泣き桜

2010年11月19日20時34分発行